

日刊 動労千葉

84. 1. 13

No. 1538

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五（公衆）〇四七二（七）七二〇七

「総学習」のトップをきって まず、本部役員研修講座からスタート



84年本部役員職員学習会

~~~~~

今年の動労千葉の獲得目標の一つである、「組合員総学習による理論武装の強化」の一環として、そのトップをきって「本部役員研修講座」が一月十日、動力車会館において開催されました。

講師には、国鉄問題研究会発行の『臨調国鉄攻撃と労働者階級』の著者である杉田明氏を招き、講演をうけました。

杉田氏は著書出版の契機について、「今日の臨調・行革攻撃のもとで、従来の民同労働運動が総屈服し、崩壊していつている。そのような状況の中で、動労千葉の闘いは今日の労働運動の危機を突破する質をもつものとして説得力をもっており、これを全国の国鉄労働者・全労働者階級にかえていかねばならないと思つたからです」と前置きしたうえで、第Iテーマ「臨調・行革攻撃とは何か」、第IIテーマ「国鉄問題」の講演に入りました。

本号では、講演の要旨について掲載します。

~~~~~

第Iテーマ

「臨調・行革攻撃とは何か」

臨調・行革攻撃とは何かを理解するためにも、今日の日本帝国主義の体制的危機について、正しくとらえることが必要です。

それは、戦後日本帝国主義が存立基盤としてきた「戦後民主主義（平和と民主主義）」、「日米安保」高度経済成長（輸出立国）の三つの契機のことごとくが、八〇年代を迎えてカベにぶつかると、やっけて行けなくなったということによります。すなわち、朝鮮半島をめぐる緊張は、経済力に見合う軍事力で権益を守るという意識からの有罪立法発言として、軍事大国化・改憲にむけて大きくカジをきりました。また、高度経済成長の行きづまりと世界不況の中で、脱出をかけた殴りこみの輸出とやみくもな国債発行は、米・欧州の保護主義、貿易規制と一一〇兆円の国債残高返済をひかえ、労働者・人民に「重税」「合理化」等の犠牲をおしつけ、福祉を切り捨てても軍備はどんどん突出させるといふ絶望的な臨調・行革攻撃が激化するのです。

だから、この攻撃は、動労革マルが言っているような「働かざるを上げて赤字をなくせばおさまる」といったうわつづらの攻撃ではなく、戦後体制を右側から反動的につくりかえるという体制危機突破をかけた全面攻撃にほかなりません。体制の生きのこりかけた軍事大国化・改憲攻撃として臨調・行革攻撃があり、国鉄労働運動破壊攻撃があるのです。このポイントをはげずして、「赤字をどうするか」「働こう」式の論議は結局のところ運動の解体と総屈服を不可避とするものです。

第IIテーマ「国鉄問題」

国鉄危機には、「いわゆる赤字問題」と「労使関係」の二つの側面があります。

第一の「国鉄財政危機」は、戦後の高度成長の一環である国鉄政策が破綻する中で生まれたものです。

つまり国鉄「赤字」は、国鉄を不況脱出の手段として自民党・財界がむらがり、採算を考えずに食いつぶしてきたツケがまわってきたということです。

また、第二の点では、侵略動員体制Ⅱ城内平和づくりの攻撃により、七〇年以降、既成の運動が変質させられ、つぶされていく中で、三里塚は人民の実力闘争に支えられた大衆運動として力強く成長してきました。日帝にとつて「三里塚」と「国鉄」の解決なくして八〇年代の軍事大国化・改憲攻撃はありえません。「職場規律」攻撃は、その典型といえます。

国鉄労働運動の現状は、既成の民同労働運動が敵の強圧と懐柔攻撃によつてずると後退し解体されていつており、一方で当局に積極的に協力Ⅱ連合して闘う労働者に襲いかかるという動労革マルのような反動・腐敗集団を生み出しています。国労指導部は、「何もとれない」「挑発者だ」との動労「本部」革マルの反動的で誤つた「批判」に「やっばりとれなかつたのか」などと動揺していますが、経済主義的なものにだけしがみついていたのでは、この危機を一步も打開できないのは当然のことです。

動労千葉が動労「本部」革マルと対決して、原則を堅持し、「三里塚を闘う労働運動」路線を掲げて、このカベを突破する闘いを勝利的におし進めている事に心から感動し、力強く思うものです。全国の労働者がこの道を共に闘い進んでほしいと願うものです。